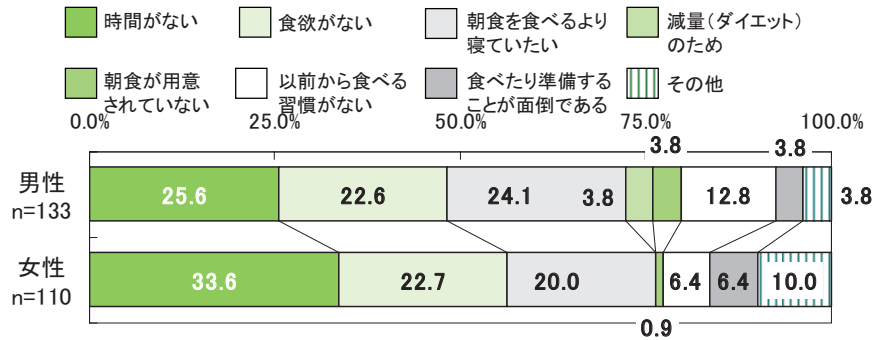


■朝食を食べない最も大きい理由 ～0歳を除く～

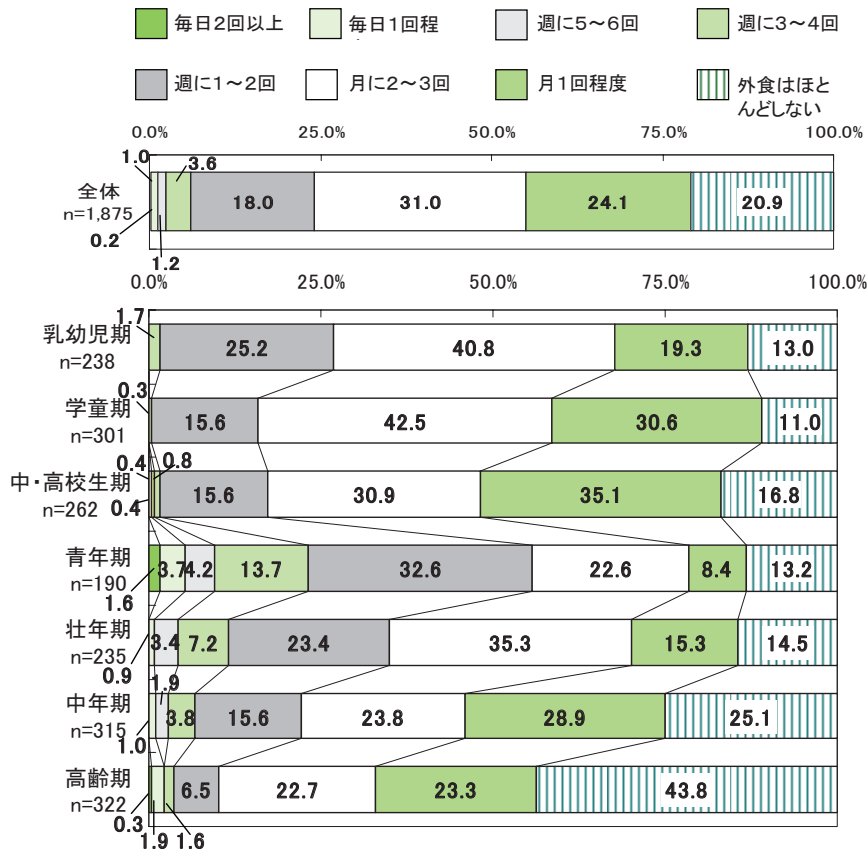


平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

(3)食の外部的化

ライフスタイルの変化等に伴って、調理や食事を家の外に依存する状況が見られ、食品産業界においても、外食のみならず、調理済の食品や惣菜、弁当といった「中食（なかしょく）⁴」の提供や開発が進んでいます。

■外食の頻度 -0歳を除く-

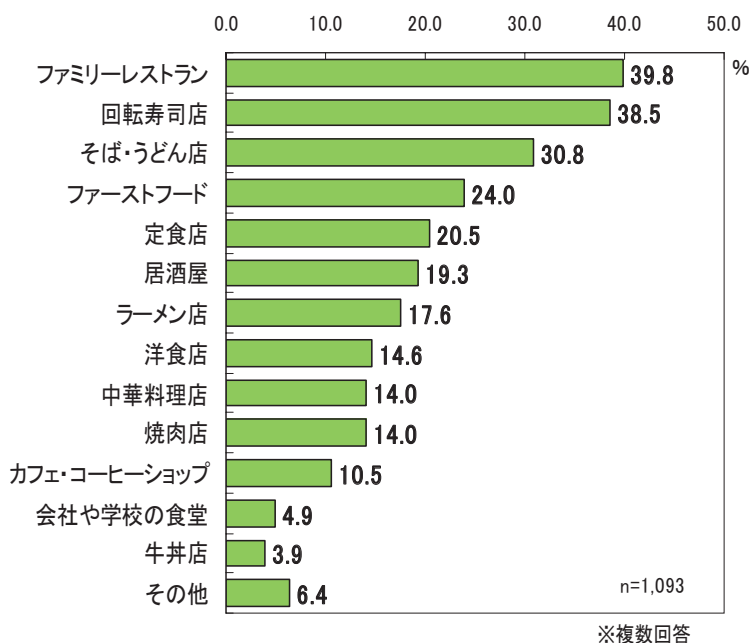


平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

⁴ 「中食(なかしょく)」 惣菜店等の家庭外で調理された弁当や調理食品を持ち帰って、家庭の食卓で食べることで。

本市における外食の頻度として青年期では半分以上の人が週に1回以上外食をすると答えています。また、よく利用する施設としては、「ファミリーレストラン」39.8%、「回転寿司店」38.5%、「そば・うどん店」30.8%、「ファストフード」24.0%などとなっています。

■外食時によく利用する施設 -15歳以上



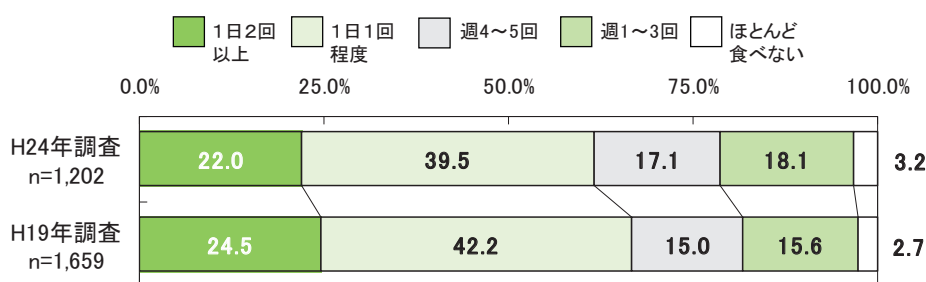
平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

(4) 栄養の偏り

従来、日本には、米を中心として、一汁三菜で構成される「日本型食生活⁵」が定着していましたが、全国的にも近年、脂質の過剰摂取や野菜不足等の栄養の偏りが見られます。

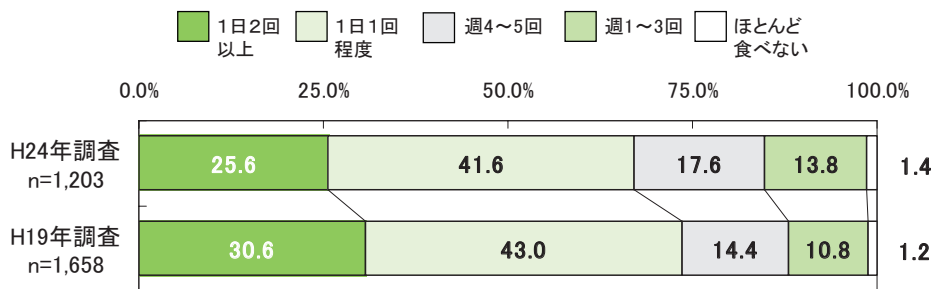
本市における野菜の摂取頻度ですが、緑黄色野菜については、「1日1回程度」が39.5%、「1日2回以上」が22.0%であり、その他の野菜については、「1日1回程度」が41.6%、「1日2回以上」が25.6%となっており、どちらも平成19年調査より減ってきており、摂取不足が予想されます。

■緑黄色野菜を食べる頻度 -15歳以上-



⁵ 「日本型食生活」 主食である「米」を中心として、大豆・野菜・魚などの副食物を組み合わせたものに、畜産物や果物などがバランスよく加わった食事パターンです。

■ その他の野菜を食べる頻度 -15歳以上-

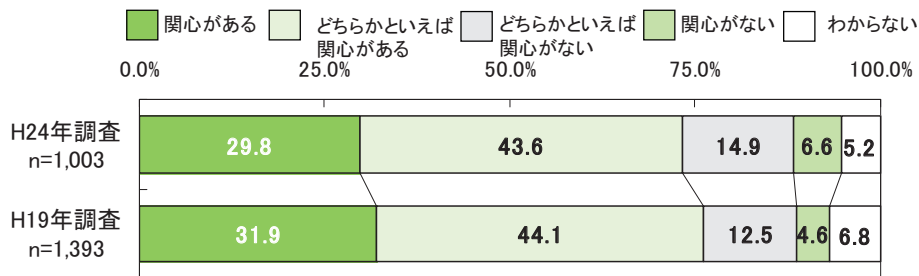


平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

(5) 食に関する関心や意識

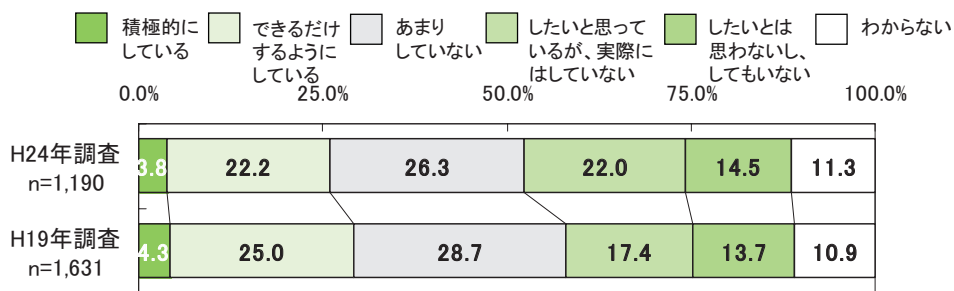
食事バランスガイド等を活用した食育に関する積極的な啓発を進めた結果、「食育に関心がある」割合は、73.4%となっていますが、食育に関する行動⁶や活動を実践している市民は、26%と非常に低い状況となっています。

■ 食育への関心度 ~20歳以上~



平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

■ 食育に関する活動や行動 ~15歳以上~



平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

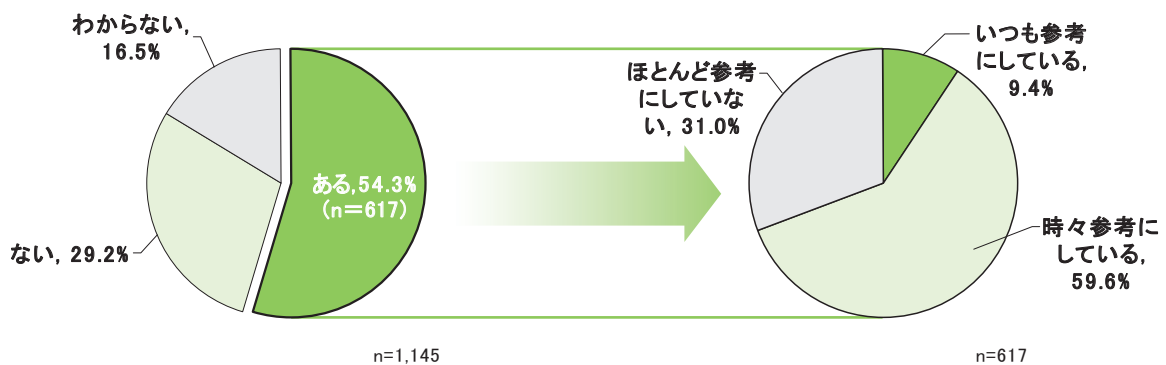
⁶ **食育に関する行動** 栄養バランスのとれた食生活の実践、より安全な食品の購入、農業・加工活動への参加・体験、食生活改善に関する勉強会やボランティア活動への参加などのことです。

(6) 事業者における食育の状況

飲食店や食料品店は、単に商品を提供するだけではなく、食に関する情報を発信する場でもあり、大きな影響力があります。本市においても市民が身近なところで「食」に関する情報を得ることができ、食育を実践しやすい環境を整備するために H20年度から「栄養成分表示事業」を実施してきました。

その結果、本市では、飲食店、食品売り場等で栄養成分表示⁷を見たことがある市民(54.3%)のうち、メニューを選ぶ際に栄養成分表示を「いつも参考にしている」市民は9.4%、「時々参考にしている」市民は59.6%となっています。

■ 飲食店、レストラン、食品売り場等における 栄養成分表示の認知度～15歳以上～
 ■ 栄養成分表示を参考にしてメニューを選ぶか。～15歳以上～

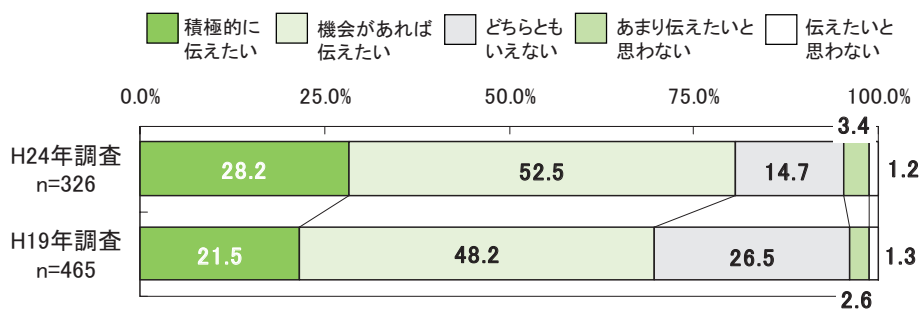


平成 24 年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

(7) 食文化の伝承意向

「家庭での食事に郷土料理等を取り入れている市民の割合」は大きく減少しており、特に若い世代での減少が目立ちます。一方、「郷土料理や食文化等を伝えたい」という高齢者は平成19年より増加しており、高齢者の伝えたい思いを、実践に結び付けていくための工夫が課題となります。

■ 熊本の郷土料理や伝統文化、食文化についての子や孫への伝承意向 -65歳以上-



平成 24 年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

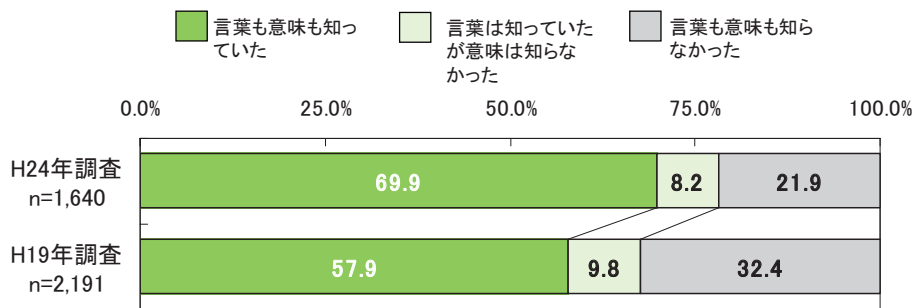
⁷ [栄養成分表示(栄養表示)] 加工食品や外食、給食に対して、その食品または献立が含んでいる栄養成分を表示することです。加工食品に対して表示する場合は、健康増進法第31条に規定されている「栄養表示基準」に従わなければなりません。

(8) 地産地消

市民アンケート調査において「くまもとらしさ」を感じることに、「水がおいしいこと」や「果物や野菜、米など農産物おいしいこと」を挙げる市民が多く、恵まれた自然環境で育つ「農産物」「水産物」は、市民の誇りです。

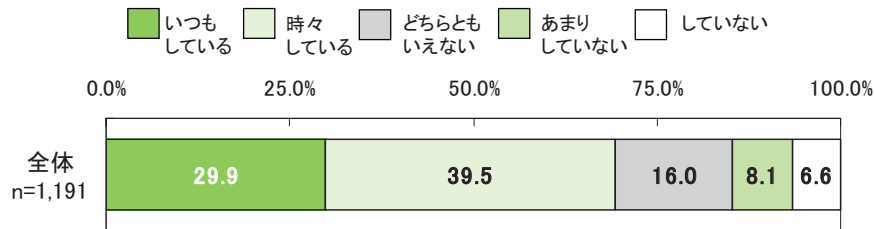
本市においては、「地産地消⁸」の意味を知っている市民の割合は 69.9%と増加しました。また、購入をしているかの問いに対しては、「いつもしている」市民が 29.9%、「時々している」市民が 39.5%となっています。

■ 地産地消の認知度・理解度 -6歳以上-



平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

■ 地元産の農産物や水産物の購入 -15歳以上-



平成24年「熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート調査結果」から

⁸ **地産地消** 地域生産地域消費の略語で、地元で生産された農産物を地元で消費することです。広い意味では、産地と消費者との物理的な距離のみならず、心理的な距離も縮めることも含めるという考えもあります。

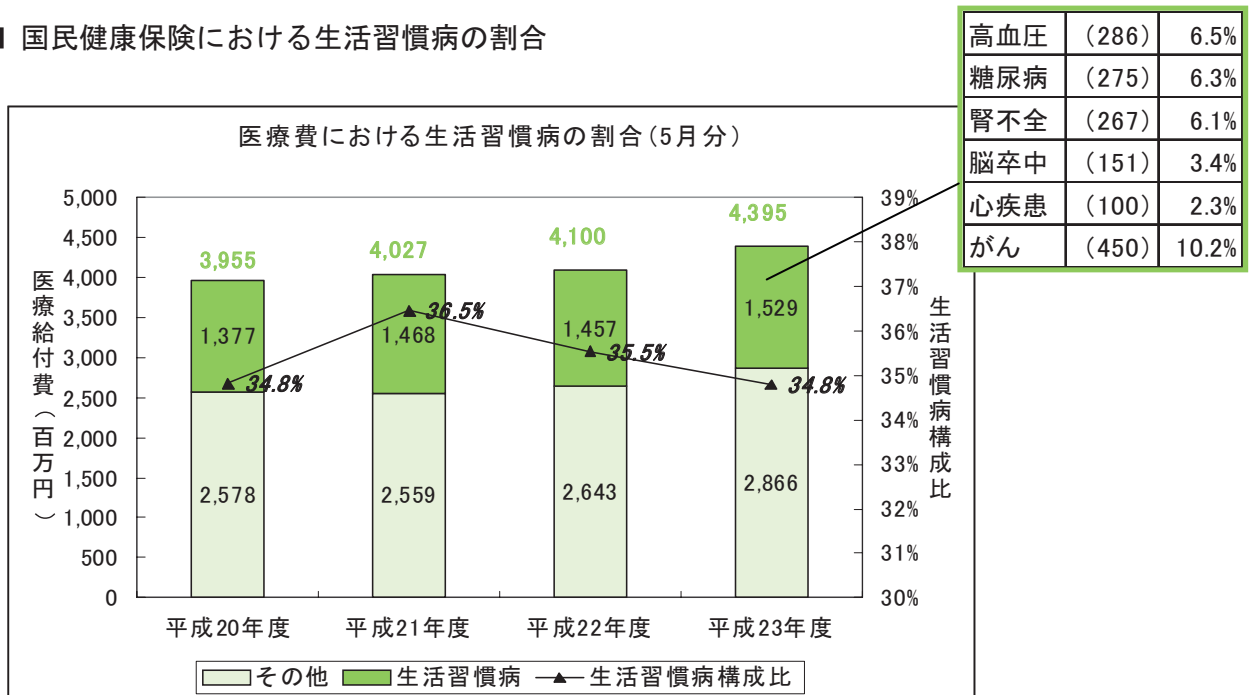
4 生活習慣病の現状

(1) 疾病の罹患状況

近年、生活習慣病の増加に伴い、国民健康保険の医療費も年々増加傾向にあり、その中で生活習慣病にかかる医療費は3割を超えています。

また、本市は政令指定都市の中で最も人工透析者数の割合が高い水準にあり、H21年度からCKD(慢性腎臓病)対策として、啓発や早期発見から重症化防止の総合的な取り組みを進めています。特に腎臓内科専門医とかかりつけ医との連携による「CKD病診連携システム」は対策の柱として順調に稼働しています。

■ 国民健康保険における生活習慣病の割合



熊本市国民健康保険『医療費分析(H23年5月)』から

(2) 肥満とやせの状況

肥満は、がん・循環器疾患・糖尿病等の生活習慣病との関連がありますが、本市では、40歳から60歳の男性の3割が肥満症です。

アンケート調査結果では、「適正体重に近づける心がけ」については、「適正体重を維持している」が26.7%、「適正体重に近づけようと心がけている」が38.4%となっています。また、運動習慣についてみると、15歳以上で「運動の習慣がある」市民は3人に1人と増加しました。今後もよりいっそう手軽で実践しやすい運動の情報提供をすすめていきます。